

クツツエーを読むスピヴァク——他者を知る／語るということ

木村 茂雄

1 はじめに

J・M・クツツエーは、一九四〇年に南アフリカのケープタウンに生まれたオランダ系白人の小説家である。一九七四年の『ダスクランズ』でデビューし、一九八三年の『マイケル・K』と一九九九年の『恥辱』によりブッカー賞を二度受賞している。これは同賞が創設されてからはじめてのことだった。二〇〇三年にはノーベル文学賞も受賞した。ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクは、一九四二年にインドのコルコタに生まれ、一九八〇年代以来、アメリカを拠点にポストコロニアル批評を牽引してきた。二〇一二年には、ユルゲン・ハーバーマスやポール・リクールについて京都賞（思想・芸術部門）を受賞している。

それぞれに現代を代表する作家、批評家の一人である。ただし、この二人の文筆活動の根底には、その活動自体に対するある種の限界の意識が横たわっているように思う。より正確にいうなら、文学や批評による「他者」の表象の限界に関する、自己を苛むような意識である。しかし、逆説的なことに、そのような限界の意識こそが、二人の卓越した文学や批評を生み出す力になってきたといえそうなのだ。

スピヴァクは、一九八〇年代からこれまででほぼ三十年の間、クツツエーを読みつづけてきた。そして、その折々におけるクツツエー作品

への応答が、彼女の批評の展開にとって重要な節目にもなってきたように思われる。以下、クツツエーを読むスピヴァクのいくつかの局面を検討しながら、ポストコロニアル時代／グローバル時代における文学と批評の問題と可能性の一端に光を当てていきたい。

2 『敵あるいはフォー』

——「サバルタンは語ることができるか？」

一九八六年のクツツエーの『敵あるいはフォー』(Foe)は、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』をひとつの下敷き⁽¹⁾にしている。ちなみに原題のFoeは、デフォーの本名であると同時に「敵」を意味する普通名詞でもある。物語はクルーソーとフライデーの孤島に、スーザンという名の女性が漂着するところからはじまる。これはもちろん原作にはない展開だが、原作の勤勉なクルーソーが本作ではいたって怠惰な男とされるなど、他にもしばしば原作のズラしや逆転が行われている。なかでもとくに重要なのは、フライデーの「沈黙」という点だろう。本作品のフライデーは、何者かによって舌を切られ、文字通り舌／言語(tongue)を失った黒人とされているのだ。

スーザンはのちに作家のフォーに、次のように述べる。「フライデーに

は言葉が使えないから、他の人たちの欲望に合わせて自分が毎日作り変えられても、まったく抵抗できない……世界にとって彼がどんな存在か、それは私が彼をどう思うかということなのよ」(Coetzee 1986: 121-122)。それでも彼女は、フライデーの「真実」を突き止めようと、石板を使って彼に書き言葉を教えようと試みる。そのようにして彼に「声」を与えようとするのだが、それも結局は失敗に終わる。

このフライデーの「沈黙化」や、彼を解釈して「作り変える」表象行為についての指摘は、ひとつには、植民地主義の暴力性や権力性の暴露として読むことができるだろう。たとえば、一九八七年のある書評は、「植民地主義と人種差別がもたらした破壊的で非人道的な帰結に対する苛烈なまでの審判」をそこに読み取っている (Attwell 1993: 108)。「犠牲者」フライデーについての、これはごく自然な解釈だろう。

スピヴァクも一九九一年の論文「周縁の理論——デフォーの『クルーソー』／『ロクサーナ』を読むクツツエーの『フォー』」で、同じ問題を取り上げている。しかし、フライデーは「犠牲者というだけではなく、主体でもあるのだ」と論じるあたりが彼女らしい。つまり、植民地主義も反植民地主義も「ネイティブ」に語らせようとするが、そこにはつねに、「ネイティブ」が「保留する場」(a space of withholding)が残されているというのだ (Spivak 1991: 172)。たとえば、フライデーが不可思議な文様を書き散らした石板を見せるようスーザンに迫られたときも、彼はその文様を唾でかき消してしまう。「保留すること」つまり「語らない」というところに、スピヴァクは「ネイティブ」のぎりぎりの「主体性」を見いだしているようなのだ。

しかし、これは逆説的でわかりにくい論法だろう。スピヴァクはこの議論の直後、彼女自身の「サバルタンは語ることができるか？」を含むポストコロナル理論に対するベニータ・パリーの批判に言及している。やや唐突な論の運びのようだが、これはいまの議論に関連して、この論文を参照せよというスピヴァクの誘いでもあるだろう。彼女のもっとも

重要な論文のひとつである「サバルタンは語ることができるか？」(一九八八年)は、インドの「寡婦殉死」を取り上げ、亡夫の後を追って焼死した女性たちの「声」の痕跡が、イギリス側の言説からもインド側の言説からも完全にかき消されていることの問題について論じていた。また、この点に関連して、同論文がフーコーとドゥルーズの対談「知識人と権力」への批判に縁どられている点も重要である。

この対談もスピヴァクの批判もそれぞれに複雑だが、本稿にとつてくに重要なのは、知識人による代弁＝表象に関するスピヴァクの問題意識である。スピヴァクは論文の冒頭近くで、「大衆はきわめて明確にわかっている」、「彼らは〔知識人たちよりも〕ずっとよくわかっている、それを非常にうまく発言している」といったフーコーの言葉を引用している (Spivak 1988: 274. 強調は原文)。しかし、はたしてそのとおりなのか？

ドゥルーズは「もはや代弁＝表象などない、行動あるのみだ」と宣言する (同 275)。これは責任ある知識人の態度なのか？「大衆」や「労働者」についてのこのような発言も、これらの人びとを「代弁＝表象」することに他ならないのではないか？スピヴァクはそう考える。「これらの知識人たちは、大衆を代弁＝表象することにより、自分たちを透明な存在として表象しているのだ」(同 275)。そして、「(他者)を(自己)の影として構築しつづけることに知識人たちが共犯者として加担している可能性」を指摘する (同 280)。論文の最後では、「サバルタンは語ることができない」という有名な一文のあとに、「代弁＝表象の作用はいまだに衰えていないのだ」と付け加えている (同 306)。

この論文を批判したパリーは、インドの歴史においても女性たちの声の「痕跡や証拠」を探り当てることは可能であり、スピヴァクはただ彼女たちに「語らせようとしなさい」のだという。スピヴァクはこれに対し、静かな口調で述べている。「彼女(パリー)の(ネイティブに声を与えようとする)努力も、私の(それにつきまとう問題に警鐘を鳴らそうとする)努力も、フライデーと彼の保留する石板がひとつの印であるような、

あの不可思議な周縁によって裁かれることになる」(Spivak 1991: 173)。「サバルタンは語ることができない」という発言は、ネイティブ／サバルタンの(上からの)代弁＝表象が、たとえそれが善意のものであっても、これらの人びとの声の抑圧につながりかねないことに警鐘を鳴らした言葉と解釈できる。そのような意味で、パリーの「反証」はやや的外れなものといえるだろう。それはともかく、このようなスピヴァクの問題意識を踏まえるなら、フライデーを語れない／語らない存在としたクツエーの文学表象自体に彼女は「保留」の姿勢を読み取り、それを評価していたことは想像に難くない。

一方、小説の結末は、おそらくは作者クツエー自身に近い視点で、海底の難破船へと降りていく幻想的な場面に一転する。そしてそれは、フライデーの「声のない発話」で結ばれている。

彼の口が開く。彼のなかから、ゆるやかな流れが、呼吸もせず、途切れることもなく流れ出す……それは島の岸壁と岸辺を洗い、北へと南へと、地の果てまで流れていく。柔らかに冷たく、暗く、絶えることなく、それは私の頬にあたり、私の顔の皮膚を打ちつづける。(Coetzee 1986: 157)

この声のない発話には、ひたすら表象の対象とされるのみで、自己表象の手段を奪われてきたフライデーや他の多くの人びとにクツエーが託した、抵抗や発話の可能性が織り込まれていると読むこともできるだろう。しかしスピヴァクは、「愛情をこめて書かれた結末であり、それを捨て去ることはできない」としつつも、「呼吸もせず、途切れることもなく」という表象は、「語間のスペースに裏切られている」という(Spivak 1991: 174, 175)。つまり、フライデーの分節化されない発話も、単語の間にスペースを置いた英語の文章により分節化されてしまっているというのだ。これは鋭いが、少し「うがちすぎ」の批判と感じられなくもな

い。しかし、後年のスピヴァクの回想によれば、クツエー本人が彼女に、この論文は「自分をもっとも恐れていたこと」を言い当てていると語ったという(Spivak 2014: 115)。クツエーが「もっとも恐れていたこと」とは何だったのか、スピヴァクは具体的に示していないが、それはこの結末における表象の「裏切り」の指摘だったのではないかと私は想像してみる。クツエーもスピヴァクも、従属化された人びとの表象の問題について、それくらい敏感な作家／批評家だからだ。

3 『夷狄を待ちながら』と『恥辱』

——テレイオポイエーシス、惑星性

前節のスピヴァクは、「ネイティブ」に声を与えようとする試みにつきまとう問題に「警鐘を鳴らす」と述べていたが、一九八〇年代から一九九〇年代のスピヴァクは、じつさい、デリダから学んだ脱構築の視点と方法を駆使して、西欧の支配的な言説にメスを入れることにウェイトを置いていたように思う。一方、今世紀に入ってから彼女の批評は、そのような批判意識を維持しつつも、従属化された主体にどのようにアクセスするか、それらの主体をどのように救い出すかという課題に軸足を移してきたように思われる。

本節のサブタイトルにある「テレイオポイエーシス」は、二〇〇三年の『ある学問の死』で導入された概念である³⁾。これも最初はデリダの概念だが、スピヴァクはそれを他者に対する想像力という問題に援用している。「遠い」という意味の「テレイオ」と、アリストテレス的な意味での「ポイエーシス」(形成、創造)を結びつけたこの言葉は、噛み砕けば、「遠い他者の形象を創造的に読む」と／想像する」と／理解していいだろう。ただしその試みは、他者を読むことの不可能性やその意味の決定不可能性と切り離すことができない。また、他者を読む自己が、その他

者に読まれているという双方向性を可能な限り自覚したものでなければならぬ。このような「テレオポイエシス」の思想にとつて、デリダと並んで重要だったのが、クツツエーの一九八〇年の小説『夷狄を待ちながら』(Waiting for the Barbarians)である。

作品の舞台は架空の「帝国」の辺境の地、主人公はそこに長く勤務してきた「執政官」の「私」である。そこに「夷狄」すなわち「野蛮人」が侵略を企んでいるという噂が広がり、ジョル大佐なる人物が中央から派遣されてくる。彼は「野蛮人」たちに先制攻撃を仕掛け、その捕虜を拷問にかける。「私」は、この暴力の罪を償おうとするかのように、拷問で両足をつぶされた「野蛮人の少女」をかくまい、介抱し、最後は彼女を仲間のもとに送り届ける。スピヴァクがここで注目するのは、この「少女」の意味を読もうとする「執政官」の試みとその失敗である。

私はこの少女の、他の何ものにも還元できない形象のまわりに舞い降りたり旋回したりしつづける。彼女の上に意味の網を一枚また一枚と投げかけながら……彼女の眼には何が映っているのだろうか？ 自分を守ってくれる守護神のアホウドリか、それとも獲物がまだ息をしている間は攻撃することのできない、臆病なカラスの黒い姿だろうか？ (Coetzee 1980: 81)

この少女の「他の何ものにも還元できない形象」(the irreducible figure)は、スピヴァクによれば、「意味の決定不可能性の形象化」でもある(Sпивак 2003: 22-23)。つまり、「執政官」が「意味の網」を何度投げかけても、この少女の意味は最後まで捕捉できないのだ。また、自分がこの少女にどう見られているのかと自問する彼の他者意識も、スピヴァクにとって重要なポイントである。そしてスピヴァクは、この少女を読む「執政官」に文学を読む者を重ね合わせる。「文学はシステムから逃れる。それを速読することはできない。その形象はじつさい還元不可能な

のだ」(Spivak 2003: 52)。しかし文学の読者は、その形象を読む努力をあくまでもつづけなければならない。「文学研究は(形象)を案内人になければならないと私は述べてきた。形象の意味は決定不可能である。しかし私たちは、それを脱形象化する／歪める (dis-figure) ことを試みなければならない。メタファーの論理を読むことを試みなければならないのだ」(同「」)。あえてまとめるなら、他者の意味や文学の意味は究極的には決定不可能だが、そのこと自体を意識しつつ、また、読む自己と読まれる他者との双方向的な関係を意識しつつ、その形象をゆつくりと丁寧に読む努力が、西欧中心主義や理性中心主義に偏らない読み方で文学を読み、他者を読み、世界を読む可能性を切り開くのだと彼女は主張しているように思われる。

ところで、クツツエーと並んでスピヴァクにとって重要な作家に、彼女の母語のベンガル語で書くマハスウェータ・デヴィがいる。一九八〇年代からスピヴァクは、そのいくつかの作品を英語に翻訳してきたが、『ある字間の死』では『翼竜』(Pterodactyl)という作品をクローズアップしている。インドのベンガル地方に、カースト制にも含まれない太古からの先住民が住んでいる村があり、そこに大昔に死滅したはずの翼竜が復活したという噂が広がる。そして、一人のインド人ジャーナリストがその村に調査に入る。彼は先住民たちに共感を抱く人物として描かれているが、そのような彼も翼竜の正体をつかむことはできず、村人とのコミュニケーションも十分には成立しない。その間にも、翼竜が、村の上に大きな影を落として飛んでいくイメージが書き込まれている。

スピヴァクは触れていないが、このジャーナリストは物語の最後に、自分のような近代的な人間と翼竜との間には、また、先住民たちとの間には「コミュニケーションの接点 (communication point)」が失われてしまっていることを認める。そして、その接点を築くにはどうすればいいのかという問いに、「長い間、理性を越えて愛さなければならない」と答える。「数千年の間、私たちはこれらの人びとを愛してこなかった、尊

敬してこなかった……これらの人びとと本当の交流ができていたら、私たちはもっと豊かな人間になっていただろうに」(Spivak 1995: 195)。
スピヴァクはこの『翼竜』をひとつの手がかりとして、「グローバル性」を上書きする「惑星性」というビジョンを立ち上げる。これはいうまでもなく、遠い他者の形象を創造的に読む試みとしてのテレビオポイエーシスとも通底するビジョンである。

地球(globe)はコンピュータに収められている。それが世界銀行の理法である。誰もそこには住んでいないが、しかし私たちは、グローバル性をコントロールすることを目指すことができると考えている。惑星(planet)は他者性の種に属し、もうひとつの別のシステムに従っている。しかし私たちはみな、この惑星を借り受け、そこに住んでいる。じつさい私たちは惑星そのものののだ。ただし、それと地球とを明確に対比することもできない。(Spivak 2003: 72)

最後の文章が示唆するように、スピヴァクは「惑星性」を「グローバル性」の否定概念としているわけではない。グローバリゼーションがそう簡単に「否定」できるものでないことはもちろん彼女も承知している。それにしても、私たちは本当に地球のことを知っているのだろうか？そこに住む限りなく多様な人びとのことを、本当に知っているのか？そんなことはあり得ないというのがたぶん正解だろう。そのような意味で、この地球という惑星自体が私たちにとって他者であり、私たちが知らない他者、彼女が「サバルタン」という言葉で言い表している従属化された他者も、この惑星には無数に存在することになる。

『ある学問の死』でスピヴァクは、一九九九年に出版されたクツツエーの当時の最新作『恥辱』(Disgrace)にも言及している。それが「このエッセイに取り憑いている(haunts)」と云々彼女という。

『恥辱』がこのエッセイに取り憑いている。この作品は『闇の奥』への「真の」応答であり、この歴史的局面において、南アフリカという特定の場所において、「ネイティブ化する(goin native)」ということなどがどのように想像できるかを示しているのだ(同55)。

これだけではわかりにくいコメントだが、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』における「ネイティブ化」とは、アフリカ奥地に入り込んだクルツが否定的な意味でその土地と一体化し、ヨーロッパ人としての自己を崩壊させていく過程を指している。一方、『恥辱』における「ネイティブ化」は、セクハラ問題で大学を辞職したオランダ系白人のデイヴィッド・ラウリーの娘ルーシーが、黒人たちの集団レイプにより妊娠した子供を産み育てることを決意し、そのためもあって、二人の妻をもつ黒人の小作人兼愛人のような立場を受け入れる選択を指している。父親は彼女をオランダに送ることを提案するが、彼女はあくまでもその土地に留まろうとする。そして、「何という屈辱だ」という父に対し、こう述べる。「ええ、そのとおり、屈辱ね。でも、再出発するにはいいスタートラインかもしれない。たぶん私が受け入れることを学ばなければならないことなんだわ。最低ラインから出発すること。何ひとつもたずに」(Coetzee 1999: 205)。

「この歴史的局面」、「南アフリカという特定の場所」という先ほどのスピヴァクの言葉には、一九九四年のアパルトヘイト廃止後の南アフリカが意識されている。つまり、『敵あるいはフォ』が植民地問題に取り組んでいたとするなら、『恥辱』は、「ポストアパルトヘイト」という意味での「ポストコロニアル」の状況に向き合った作品と彼女は捉えているのだ。その状況におけるルーシーの「ネイティブ化」の選択を、スピヴァクは極めて真剣に受け止めているが、彼女の父親がそれに大きな抵抗感を覚えるのも当然といえば当然のことだろう。読者の多くにとっても、これはあまりにも極端なケースと感じられるのではないだろうか。このよ

うな点も踏まえ、二〇一四年の『リーディングズ』のスπιヴァクは、二〇〇九年に出版されたクツツエーの『サマータイム』(Summertime)に、『恥辱』の「書き直し」の試みを読み取っていく。

4 『サマータイム』——「ネイティブ」と移民

『恥辱』と『サマータイム』との間には、クツツエーの周辺にも大きな変化が起こっていた。二〇〇二年、南アフリカを離れ、オーストラリアに移住したのである。クツツエーがノーベル文学賞を受賞したのは、その翌年のことだった。二〇〇六年にはオーストラリアの市民権も取得している。クツツエーは、なぜ南アフリカを離れたのか？ スπιヴァクは『リーディングズ』で、『恥辱』がアフリカ民族会議などから「人種差別的」との批判を受けたことがその切っ掛けになったという説を紹介している。もっとも、スπιヴァクによれば、この批判は作品の「読み誤り」によるものだという。前節で見たとおり、スπιヴァクはルーシーをこの作品の中心に据えていたが、小説全体の語りは戦略的に父親のデイビッドを「焦点化」しているため、それが誤読を誘ったのだという。ちなみに「焦点化」とは物語論(ナラトロジー)の用語だが、クツツエーを読むスπιヴァクは、あとで紹介する「自由間接話法」の用法など、彼の語りの手法にもしばしば目を向けている。

それはともかく、クツツエーの移住の理由としてスπιヴァクがより重視しているのは、結論的にいって、「南アフリカを表象する権利が自分には本来にあるのか」というクツツエーの自己意識である。彼女はクツツエーに成り代わるようにして、繰り返し問いかける。「植民地支配者側のエリートが、サバルタンの無力さにアクセスする権利を得ることはできたのだろうか？」(Spivak 2014: 104)。「白人クレオールに、南アフリカを聖なる土地と感ずる権利はあるのだろうか？」(同 128)。そして、

彼女が『サマータイム』の中心人物と考えるマーゴの言葉を引きながら、次のように述べる。

「私たちは、ここでいつたい何をしているの？」……これは非常に真剣な問いである。まさしくクツツエー的な問いである。だからクツツエーは立ち去ったのだ。彼は自分が「南アフリカの」状況を表象する誠実な白人クレオールとはなり得ないことをさとったのだ。(同 129)

そしてスπιヴァクは、このようなクツツエーに彼女自身の自己認識を重ね合わせる。彼女は長い間、故郷の西ベンガル州のサバルタンたちの教育の問題に関わってきたが、『リーディングズ』では、これらのサバルタンたちと自分との「距離」という点に何度も触れている。これは個人ではなく、歴史が作り出した「距離」でもある。「私のカーストと階級が何千年の間、これらの人びとの知的労働の権利を否定し、多くの残酷で物質的な方法でこれらの人びとを抑圧し、社会的そして精神的な劣等性をこれらの人々に信じ込ませてきたのだ」(同 105, 117)。このような認識から、さらに次のように問いかける。「一つの人生しかもたない一人の人間としての白人クレオールにとって、歴史の重荷とはどのようなものなのか？ あるいは、社会批判を行う上位カーストのヒンズー教徒にとって？」(同 151)

しかし、話が少し先走りすぎたようだ。『サマータイム』について少し具体的に見ておこう。本作は『少年時代』(一九九七年)と『青年時代』(二〇〇二年)に継いで、クツツエーの「自伝小説」三部作を締めくくる作品である。ただし、前二作は「ジョン・クツツエー」を主人公とする三人称の語りを軸に、どちらかといえば伝統的な自伝小説の体裁を取っていたのに対し、『サマータイム』でまず読者を驚かせるのは、その「ジョン・クツツエー」がオーストラリアですでに死亡しているという設定である。そして、作品全体は、彼の伝記を書くかとしてゐるヴァンセント

という人物が、生前の彼を知る五人の人物に対して行ったインタビューを中心に構成されている。これらのインタビュー対象者の多くは「ジョン・クツエー」についてかなり辛辣に語っていて、その点でも、これが大いに風変わりな「自伝小説」といえる。ちなみにスピヴァクは、このように他者の視点から「自己」を表象しようとするクツエーに、『夷狄を待ちながら』で「少女」の目に映る自分を想像する「執政官」の姿を思い出したりしている(同118)。

スピヴァクはまず、これらのインタビュー対象者のほとんどが、作者のクツエーと同様に、南アフリカを離れ、イギリス、カナダ、フランスなどに移住した者たちであることに注意を促す。そして、移住後のクツエーの関心は、ポストコロニアル問題から現代の移民の問題へと移ってきたと指摘している(同114-115)。他方、彼女がこの小説の中心に据えるのは、先に述べたとおり、「私たちはここでいったい何をしているの?」と自問しながらも、その土地に留まろうとするマーゴの人間像である。彼女と「ジョン・クツエー」はいとこ同士で幼なじみの間柄とされているが、スピヴァクは以下のような二人の「対話」に焦点を当ててゐる。

二人で歩いているときに彼「ジョン」はいった、愛するものから、自分を切り離し、自由になること、それが一番なんだ——自分を切り離し、傷が癒えることを望むことが、彼女は彼のいつていることが正確にわかる。それは二人が何よりも共有していることだ。この農場、この土地、このカルーに対する愛だけではなく、その愛に伴う理解。愛がときには重荷になりすぎるという理解。(Coetzee 2009: 134, 強調は原文)

また、これもスピヴァクが強調している点だが、クツエーはこのマーゴに、その当時のアパルトヘイトに対する反発や自己責任の意識も託しているようだ。たとえば、彼女の母が病院に搬送される際に世話になっ

た二人の「カラード(混血)」に彼女は(口には出せない)感謝の念を抱くと同時に、自分たちの歴史的な責任にも思いを馳せる。「(私たちは)あなたたちのために何一つしてあげたことはないのに。それどころか、あなたが生まれた土地で、あなたたちを来る日も来る日も辱めることに手を貸してきたのに」(同145)。また、マーゴとその夫は、このような状況にあっても、主従関係を可能な限り乗り越えた理想的な農場を経営する計画を温めている。スピヴァクはこの計画が「封建的」な面をもつと指摘しながらも、基本的にはそれに共感している。さらにマーゴは、平凡で「どこにでもいそうな」女性として描かれている。そしてスピヴァクは、そのような女性による「ネイティブ性」へのアプローチを、『恥辱』のルーシーの「ネイティブ化」の書き直しと捉える。つまり、ルーシーのあの「ネイティブ化」は誰にでも倣うことのできるものではなかったが、それがここでは、より「普遍化可能(universalizable)」なものに書き直されていると見ていようだ。⁽⁵⁾

以上の紹介は、しかし、スピヴァクの議論の半分しか捉えていない。もうひとつ彼女が強調しているのは、小説の語りにおいて、以上のことがすべて不確定性あるいは決定不可能性の状態に置かれているという点だからだ。先ほど引用したマーゴと「ジョン・クツエー」との「対話」にある「この農場、この土地、このカルーに対する愛」の「カルー」とは、南アフリカの半砂漠の地帯だが、この土地に対する「ジョン・クツエー」の強い愛着は、作者クツエーの南アフリカ時代に書かれた『少年時代』でも語られていた。「そのすべての石、すべての茂み、すべての草の葉を彼は愛している」、「ひとつの人生では、その石や茂みのすべてを知る時間はない。ひとつの場所をこんなにも激しく愛していたら、どんなに時間があっても足りはしない」(Coetzee 1997: 80, 91)。ただし『サマタイム』では、この感情が、いわば幾重ものフィルターをとおして表象されている点をスピヴァクは重視する。

本作品は五つのインタビューを中心に構成されていると先に述べたが、

じつはマーゴの章は例外である。この章は、彼女が最初のインタビューで述べた言葉を、聞き手のヴィンセントが三人称の物語に書き直し、それを彼女に提示するという形式を取っているからだ。スピヴァクはそれを「自由間接話法」の応用とみなしている。さらに、そのように書き変えられた物語のなかで示される「ジョン・クッツェー」の「カルー」への愛や、その土地との決別の感情——「愛するものから自分を切り離し、自由になること、それが一番なんだ——自分を切り離し、傷が癒えることを望むことが」——も、彼女の口からではなく、「自由間接話法」により提示されている。そして最後には、この編集された物語について、「このままでいいですか？」と問うヴィンセントに対し、マーゴは「いえ、駄目です。このままでは駄目です」と答える。したがって、このマーゴと「ジョン・クッツェー」の物語は「オープンエンディング」の未完の物語なのだとスピヴァクはいう。

「ジョン・クッツェー」ひいては作家クッツェー自身の南アフリカへの強い愛着は、たぶん「真実」にちがいないだろう。しかし、すでに明らかだろうが、クッツェーもスピヴァクも、「真実」を表象することの困難さについては敏感すぎるくらい敏感な小説家／批評家である。ちなみにスピヴァクは、別のコンテキストで、脱構築が教えてくれるのは「真実を語ることの困難さの重要性」であると述べている (Spivak 2014: 135)。またクッツェーは、この自由間接話法を、「証明不可能な言説の内部に、真実の場となり得るような脆くて不安定な場を確保する」ために用いているのだという (同 13)。しかし、議論のコンテキストを少しずらすなら、自己を他者化しつつ、その不確定な「真実」を間接的に遠巻きに語るうとすること、あるいは「ネイティブ性」へのアプローチの可能性を、その土地から遠く離れたところから想像しようとする——これもまた、スピヴァクのいう「テレイオポイエシス」のひとつの試みといえるのではないかと思う。

5 結語

クッツェーとスピヴァクは、以上のように、南アフリカとインドという状況のちがいはあっても、その土地を支配してきた「人種」や階級に自分たちが属しているという認識とも深くかわって、他者表象の限界をつねに意識しながら文筆活動をつづけてきた作家／批評家だといえる。またその活動は、特定の状況に結びついていてだけでなく、ほとんど自縛的といってもいいような自己限定の意識に覆われている。しかし、まさしくそれゆえにこそ、その文学と批評は、私たちが過去や現在の世界について考えるだけではなく、その未来を想像／創造するにあたっても「普遍化可能」なものであるように思う。

スピヴァクは「惑星性」のビジョンを語るなかで、「人間らしくある」ということは、他者に差し向けられているということなのだ (‘To be human is to be intended toward the other’) と述べている (Spivak 2003: 73)。グローバリゼーションの負の側面として、「北」と「南」とのさまざまな格差の問題が指摘されるようになってからすでに久しい。最近では新型コロナウイルスの「ワクチン格差」まで話題にのぼっている。一方、異文化の理解や色々な意味での多様性の認識の重要性などについても、私たちはしばしば耳にしたり、語ったりするようになっていく。グローバリゼーションの状況下、そのような理解や認識がますます重要性を増していくことも確実だろう。しかし、それが他者を一方的に、いわば好き勝手に、さらにいうなら、知ったかぶりに読むことを暗黙の前提としているなら、それがいかに善意の読みだったとしても、それはかつてサイードが批判した「オリエンタリズム」の視線を反復しているにすぎない可能性があるだろう。そして、そのような他者理解や異文化理解のあり方から私たちが脱却しない限り、いまま消え残る植民地主義的な精神性や世界の構造から、私たちが本当に脱却することも不可能にちがいない。

クツツエーとスピヴァクから私たちがいま「普遍化可能」なもつとも重要な点は、このような認識にあるのではないかと思う。

スピヴァクの『リーディングズ』は、インドのエリート大学のひとつであるブネー大学の学生を相手に二〇一二年に行った講演と質疑応答に基づいている。ほぼ十年前のことである。その「結語 (Closing Remarks)」のなか私にとってとくに印象的だったのは、彼女がこれらの学生たちに、インドを「世界の国々のなかのひとつの国 (a country among global countries)」にするようにと訴えているところである (Spivak 2014: 164)。これもまた漠然としたアドバイスだが、「アジアの時代」とも称される二十一世紀におけるインドと中国の目覚ましい発展や、それと呼応する新しいナショナリズムなどにも彼女は触れている。その状況で彼女は、インドの若いエリートたちに「勝利ではなくて平等」をモデルにするようにと促す。つまり、この国をグローバルゼーションの「勝利国」ではなく、他国／他者に開かれた「普通の国」にすることを求めるのだ。これは私には、「人間らしくある」ということは、他者に差し向けられているということなのだ」という思想に裏打ちされた「グローバル人材」への誘いでもあるように思われる。

散漫な「結語」になってしまったが、クツツエーを読むスピヴァクもまだ「オープンエンディング」の未完の物語であることを願って、本稿のむすびとしたい。

注

- (1) クツツエーとスピヴァクの著作に邦訳がある場合は、そのタイトルは邦訳に従う。ただし、日本語訳はすべて本稿の著者による。
- (2) この論文は、その改訂版が『ポストコロニアル理性批判』(A Critique of Postcolonial Reason, Harvard University Press, 1999) に収録されている。ただし本稿ではスピヴァクの批評を経年的に追う意味から、この論文およびその他の論文についても、原則的にその初出にあたることにする。
- (3) 「ある学問の死」では「テレオポイエーシス (telepoiesis)」と表記されていたが、その後の著作では「テレオポイエーシス (teleiopoiesis)」に改められているので、本稿でもこの表記を用いる。
- (4) この点は彼女の『リーディングズ』でより明示的に述べられている (Spivak 2014: 116)。
- (5) スピヴァクは『リーディングズ』のいくつかの箇所、静的で西欧中心主義的なニュアンスをもつ「普遍的 (universal)」という言葉に対し、特定のテクストから読者が積極的に意味を引き出し、それを別なコンテクストに創造的に応用していくような読み方を「普遍化可能 (universalizable)」な読みという言葉で言いつづける。

引用文献

- Attwell, D. (1993). *J.M. Coetzee: South Africa and the Politics of Writing*. University of California Press.
- Coetzee, J.M. (1980). *Waiting for the Barbarians*. Penguin Books.
- (1986). *Ice*. Penguin Books.
- (1997). *Boyhood*. Penguin Books.
- (1999). *Disgrace*. Vintage.
- (2009). *Summertime*. Vintage.
- Spivak, G.C. (1988). Can the Subaltern Speak? Nelson, C. and Grossberg, L. eds. *Marxism and Interpretation of Culture*. University of Illinois Press.
- (1991). *Theory in the Margin: Coetzee's *Ice* Reading Defoe's *Crusoe/Roxana**. Arac, J. and Johnson, B. eds. *Consequences of Theory*. The John Hopkins University Press.
- (1995). *Imaginary Maps*. Routledge.
- (2003). *Death of a Discipline*. Columbia University Press.
- (2014). *Readings*. Seagull Press.